

高崎市文化財調査報告書第181集

付図2枚

下之城村前Ⅳ遺跡

—高崎都市計画事業高崎操車場跡地周辺土地区画整理事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書（2）—

2002

高崎市教育委員会

390C (349)



下之城村前館址全景

序

高崎市は、上毛三山を見渡せる、関東平野が北西の山々と出会うところに位置しています。市内には周囲の山々の水を集めた大小の河川が流れ、遙か太平洋へと通じています。こうした地理的立地条件のために、そこは、古くから人々が生活し、出会い、行き交いながら発展してきました。そして新たなミレニアムに入り、高速交通・通信のネットワーク化時代が到来し、現在北関東における「交通拠点都市」としての役割がますます増しており、21世紀を迎え更に発展していくことを目指すものであります。

さて、ここに報告します「下之城村前Ⅳ遺跡」は、高崎操車場跡地周辺土地区画整理事業に伴う下之城村前遺跡の第2次発掘調査の報告書であります。調査の結果、古墳時代住居跡、平安時代末の水田跡及び中世館址が検出されました。特に、館址は今回の調査によって存在が明らかになったものであります。周知の遺跡である「和田下之城址」と関連する遺構であると思われます。この館址の発見によって、戦国末期における高崎地域の武士団の勢力分布の一端が明らかにされるものと期待されます。

最後になりましたが、本遺跡調査の円滑な遂行にご協力いただきました地権者並びに関係諸機関の各位に厚く御礼を申し上げますとともに、記録的な猛暑の中で発掘調査に当たった担当職員と作業に従事して下さった方々に感謝を申し上げ、序といたします。

平成14年3月

高崎市教育委員会

教育長 砂田 威夫

例 言

- 1 本書は、高崎市計画事業高崎操車場跡地周辺土地区画整理事業に伴う道路建設予定地において実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 本遺跡の調査は、高崎市教育委員会が当たった。
- 3 発掘調査期間 平成13年6月26日～12月27日
整理調査期間 平成14年1月7日～3月25日
- 4 発掘場所 高崎市下之城町村前 750-1, 751-1, 748-1, 719, 745-1, 721, 722, 723, 699, 697, 692, 698, 695-3
830,834,689外
- 5 調査面積 4,500㎡
- 6 調査組織
＜事務局＞ 野尻 弘 結城千尋 斎藤寛方 片平映里
＜調査担当＞ 古田昌利
- 7 本書の編集、執筆は吉田が行った。
- 8 遺構写真及び遺物写真は担当者が撮影した。
- 9 遺構図、セクション図などの図版は、担当者の指示のもとに以下の方々が行った。
小嶋明子、善如寺陽子、小川 泉、津金寿美子
- 9 遺物、写真、図面等の資料は、高崎市教育委員会が保管している。
- 10 表土掘削及び埋填は（株）井上リース、基準点測量は（株）横田調査設計、航空写真は（株）フジテクノ、遺物実測は（有）高澤考古学研究所に委託した。
- 11 高崎市教育委員会遺跡番号は359である。
- 12 発掘調査から本書刊行まで、下記の諸氏の御指導、御助言をいただいた。（敬称略、五十音順）
金井英一、神戸聖語、関口 修、角田真也

凡 例

- 1 北マークは、国家座標第Ⅱ系における座標北である。
- 2 遺跡図は高崎市発行2500分の1高崎市都市計画図を使用した。
- 3 土層及び土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」（1998年版）を用いた。
- 4 図版の縮尺は、平面図及びエレベーション図を1：20、カマド平面図、カマドセクション図、エレベーション図1：10、遺物図を1：2、1：3、遺跡全体図を1：200とした。
- 5 本書で用いた略記号は以下の意味を表す。
SD：溝跡或は堀跡 SI：住居跡 SB：掘立柱建物跡 SE：井戸跡
SK：土坑 SX：不明遺構
尚、文章中で用いた遺構番号は、調査区ごとの番号であり、通しの番号ではない。
- 6 テフラの給源火山と推定年代及び略記号は以下の通りである。
As-A：浅間山噴出テフラ（天明3年、1783年） As-B：浅間山噴出テフラ（天仁元年、1108年）
- 7 遺跡地の基盤層である前橋泥流堆積物を「ローム」と記述した箇所がある。
- 8 「ローム粒」、「焼土粒」等の記述は、 ϕ 5 mm未満の粒子である。

本文目次

巻頭図版

序

例言

凡例

第1章 発掘調査の実施と経過	1
第1節 調査の経緯と経過	1
1 調査にいたるまで	
2 調査の経過（日誌抄）	
第2節 調査の方法	1
第2章 遺跡の立地	1
第1節 遺跡の位置と環境	1
第3章 浅間山B軽石下水田跡	7
第1節 土層	7
第2節 1区検出の浅間山B軽石下水田跡	7
第3節 2・3区検出の浅間山B軽石下水田跡	7
第4節 7・8区検出の浅間山B軽石下水田跡	8
第5節 灌溉施設	8
第4章 古墳時代遺構	8
第1節 竪穴住居跡	8
第2節 溝跡	9
第5章 中世遺構	9
第1節 下之城村前館址	9
第2節 井戸跡	16
第3節 溝跡	16
第6章 近世遺構	16
第1節 浅間山A軽石処理跡	16

図版・表・写真目次

巻頭図版	口絵
遺跡位置図	2
調査区全体図	3
土層図	4
1区 全体図	折込図版 1
1区 エレベーション図	5
2・3区 全体図	6
7・8区 全体図	折込図版 2
4区 SI02 平面図	折込図版 3
4区 掘立柱建物跡平面図 BS01～04	10
5区 掘立柱建物跡平面図 BS01・02	11
5区 掘立柱建物跡平面図 BS03～05	12
5区 掘立柱建物跡平面図 BS06～08	13
4・5区 井戸跡 平面図・セクション図・エレベーション図	14
5区 全体図	折込図版 4
4区 浅間山 A 軽石処理跡平面図	15
遺物図版 1	17
遺物図版 2	18
遺物図版 3	19
遺物図版 4	20
遺物図版 5	21
遺物観察表	22
写真図版 1	25
写真図版 2	26
写真図版 3	27
写真図版 4	28
写真図版 5	29
付図 1	
付図 2	

第1章 発掘調査の実施と経過

第1節 調査の経緯と経過

1 調査にいたるまで

高崎市都市計画事業高崎換車場跡地周辺区画整理事業は、高崎市における最重要施策の一つの位置づけられる事業である。事業竣工後は、調査地を含む周辺地域は高崎市の副都心としての機能を果たすることが期待されている。遺跡保存に向けて関係機関との協議を続けたが、開発計画の変更は難しく、記録保存を目的とする調査を実施することになった。

埋蔵文化財の発掘調査は、開発計画の事業に伴い、本体工事施工に先行して平成12年から逐次実施することになった。本調査は、2年次の調査である。

2 調査の経過（日誌抄）

平成13年6月26日 調査準備開始 6月28日 現場仮設事務所設置 7月4日 仮設道路造り 7月5日 1区掘削、残土搬出及び水田調査開始 7月16日 2区掘削及び残土搬出 7月23日 3区掘削及び残土搬出 8月6日 4区掘削開始 8月16日 1,2,3区の航空写真撮影実施 8月20日 1,2,3区埋め戻し完了 8月25日 5区掘削及び残土搬出開始 9月17日 やるベンチャーウィーク（職場体験学習）初日（倉賀野中学校生徒3名） 10月15日 やるベンチャーウィーク初日（佐野中学校生徒4名） 10月17日 7区掘削開始 11月19日 4,5,6,7区航空写真撮影実施 11月22日 8区手掘りによる掘削開始 12月26日 調査終了 12月27日 現場仮設事務所撤去

第2節 調査の方法

調査対象地は、都市計画道路3・4・53号南口駅前通り線（幅員20m）、下之城3号線（幅員18m）及び土地区画道路（幅員6m）である。対象地内には現在使われている道路、農業用水路を含むため、これらについては調査の対象から除外した。調査区の名称については、掘削した順に1～8区とした。

調査は、遺構確認まで重機により掘削を行い、その後は、手掘りの作業によって精査を行った。堅穴住居跡、堀跡及び土坑などの確認は、差懸層である黄褐色土（前橋泥流堆積物）面で行った。遺構測量用の杭は、国家座標系第Ⅰ系の任意の点を選択し、測量業者に委託して設定した。

実測図は、遺構図が1/20縮尺、カマドの平面図、セクション図、エレベーション図が1/10縮尺を基本とした。写真撮影は、35mmリバーサル及びモノクロームを併用した。調査の最終段階では、ラジコンヘリによる空中写真撮影を実施した。

第2章 遺跡の立地

第1節 遺跡の位置と環境

調査地は、烏川と井野川に挟まれる低台地上に所在する。低地が広がる中に微高地が散在している。低地は水田耕作、微高地には集落の形成や畑作農地として利用されている。

台地は前橋泥流を差懸層としている。基本的な層位は、低地では現耕作土（水田、As-Aを含む）、As-B層、As-B下水田層、基盤層（ローム層）からなり、微高地は、現耕作土（畑、As-Aを含む）、As-A、As-Bを含む混土層、黒ボク土層、基盤層（ローム層）からなる。

縄文から弥生時代の遺構は検出できなかったが、4区において黒ボク土層から中期の深鉢の破片が数点出土した。古墳時代遺構は、堅穴住居跡を2軒、溝跡を2条検出した。甕、埴、高坏等の遺物が多数出土した。

奈良・平安時代の遺構は、1108（天仁元）年の浅間山の噴火に伴う火山灰で覆われた水田跡を検出した。特に1区で検出した水田跡は、南北方向の畦畔と東西方向の畦畔によって区画された水田面が確認された。

中世遺構は、4・5区において館址を検出した。館址は、今回の調査で発見されたもので、「下之城村前館址」

とし、高崎市域で現在までに確認、検出された城館址の一つに加えた。館址にかかわる歴史的背景と概要については後述のとおりである。

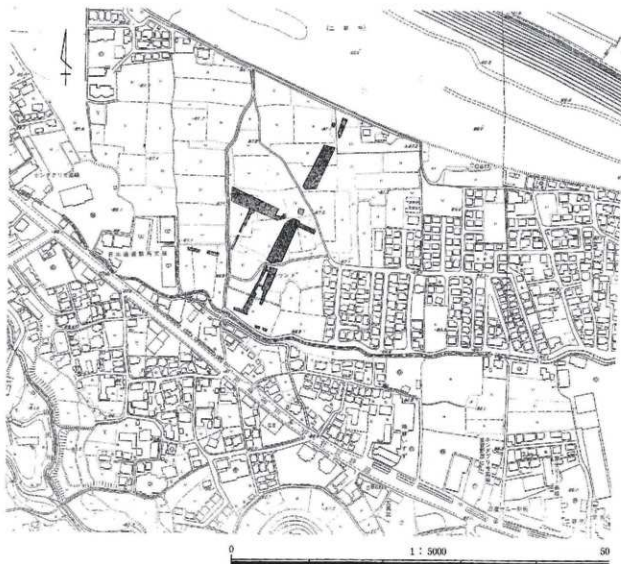
近世遺構は、1, 2, 3, 4 区において検出した。1 区では、調査区の中央部付近で As-A で埋められた溝跡が 1 条見つかった。溝の底部は、As-B 層を切り As-B 下水田面に達していた。2, 3 区では、As-A の 2 次堆積層が確認された。古くから住んでいる土地の人の話では、明治時代に周辺の火山灰を集めて畑として利用してきたとのことである。4 区で検出した As-A の 2 次堆積層は、江戸時代に As-A を処理した遺構である。ほぼ南北方向の畝を作り、As-A を埋設している。検出した箇所が、4 区の東南の端であったため、調査範囲が極めて狭く、どれくらいの規模で処理を行ったのかの全体像はわからないが、検出した箇所は、遺構の北端であることから、南の方向に伸びていくものと思われる。また、この処理跡の下から、館址の内堀が検出されている。

参考文献

「倉賀野万福寺Ⅱ遺跡発掘調査報告書」(1994、高崎市遺跡調査会刊)

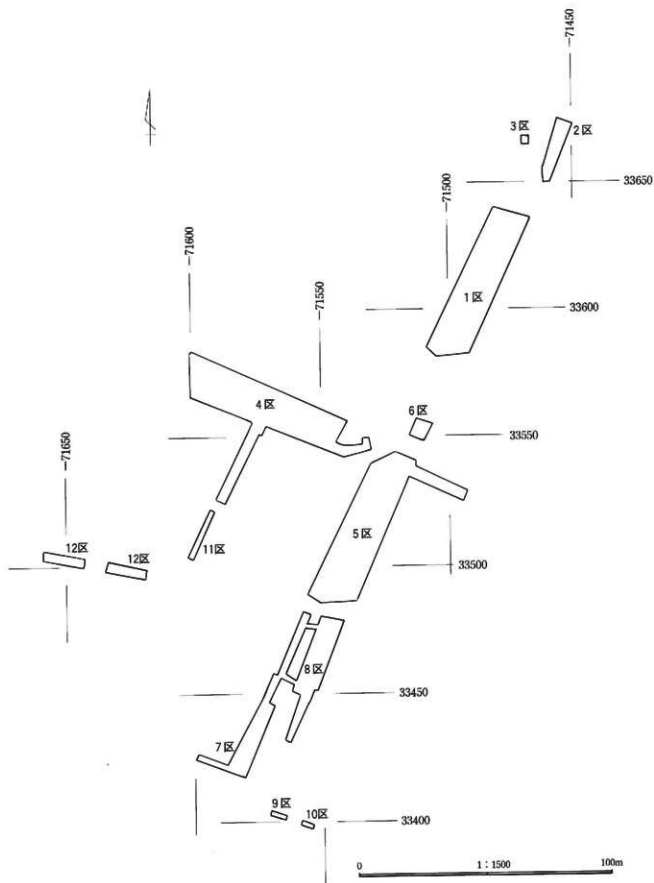
「下之城村前Ⅲ遺跡」(2000、高崎市教育委員会刊)

周辺の遺跡については、「高崎市遺跡分布地図」(1997 年、高崎市教育委員会刊) 参照いただきたい。

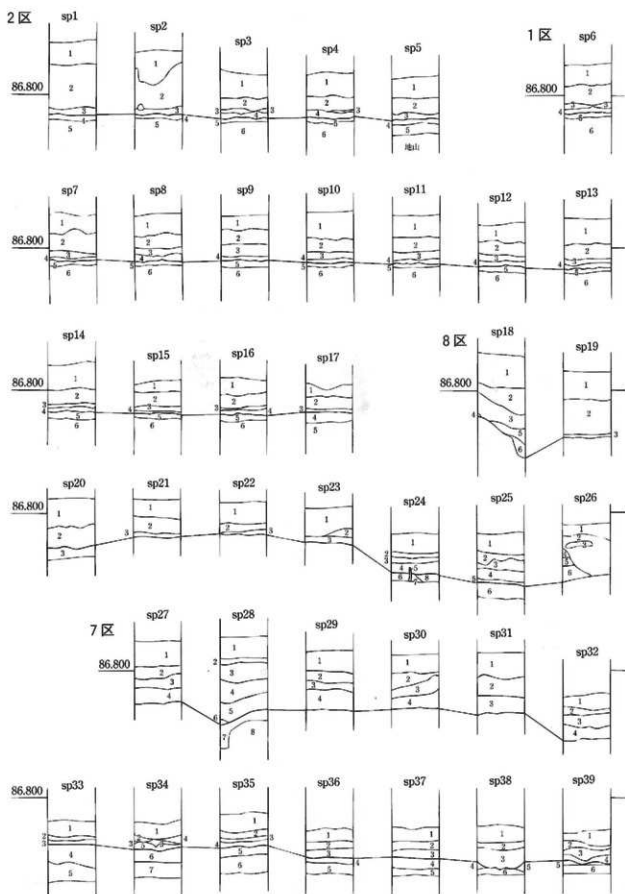


遺跡位置図

调查区全体图

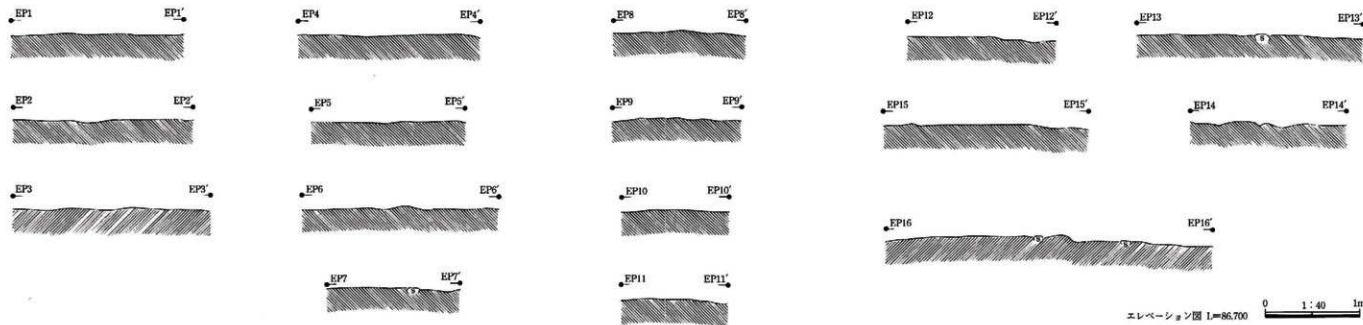
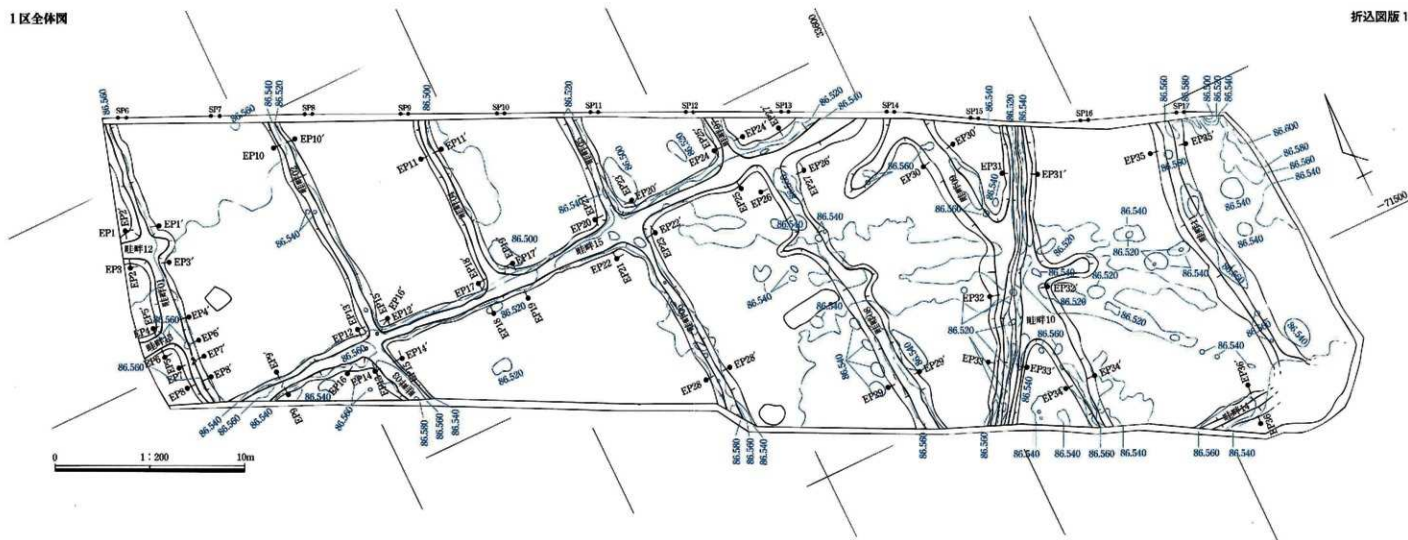


上層圖



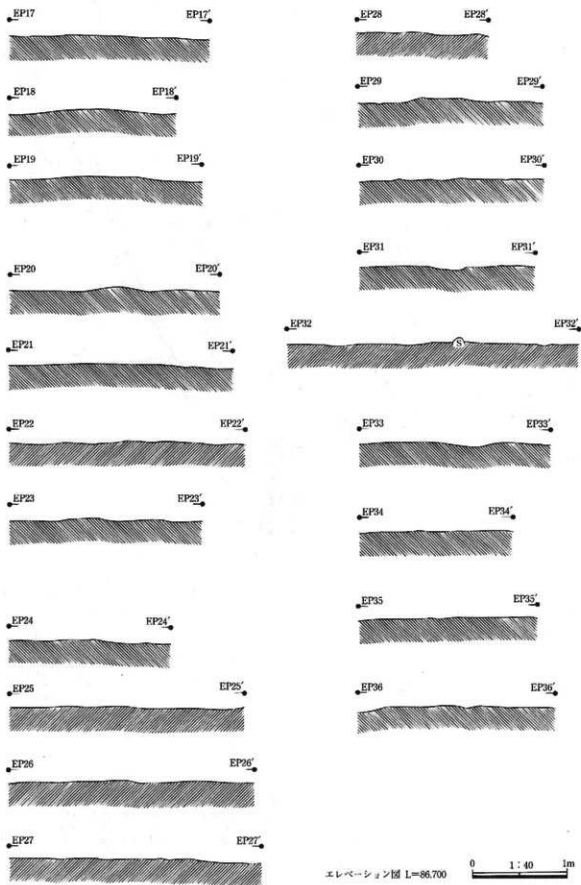
1区全体図

折込図版1



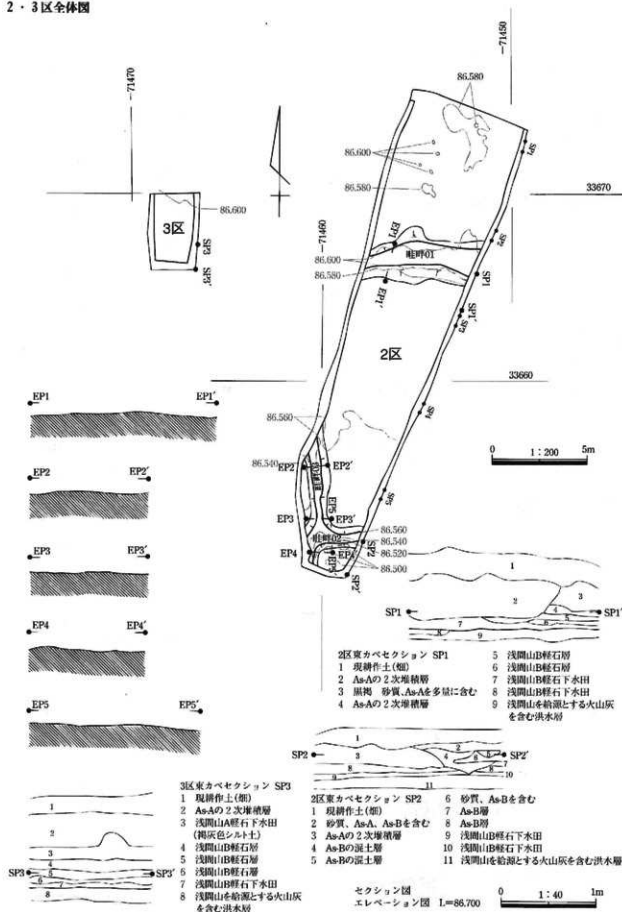
エレベーション図 1=86.700

I 区エレベーション図



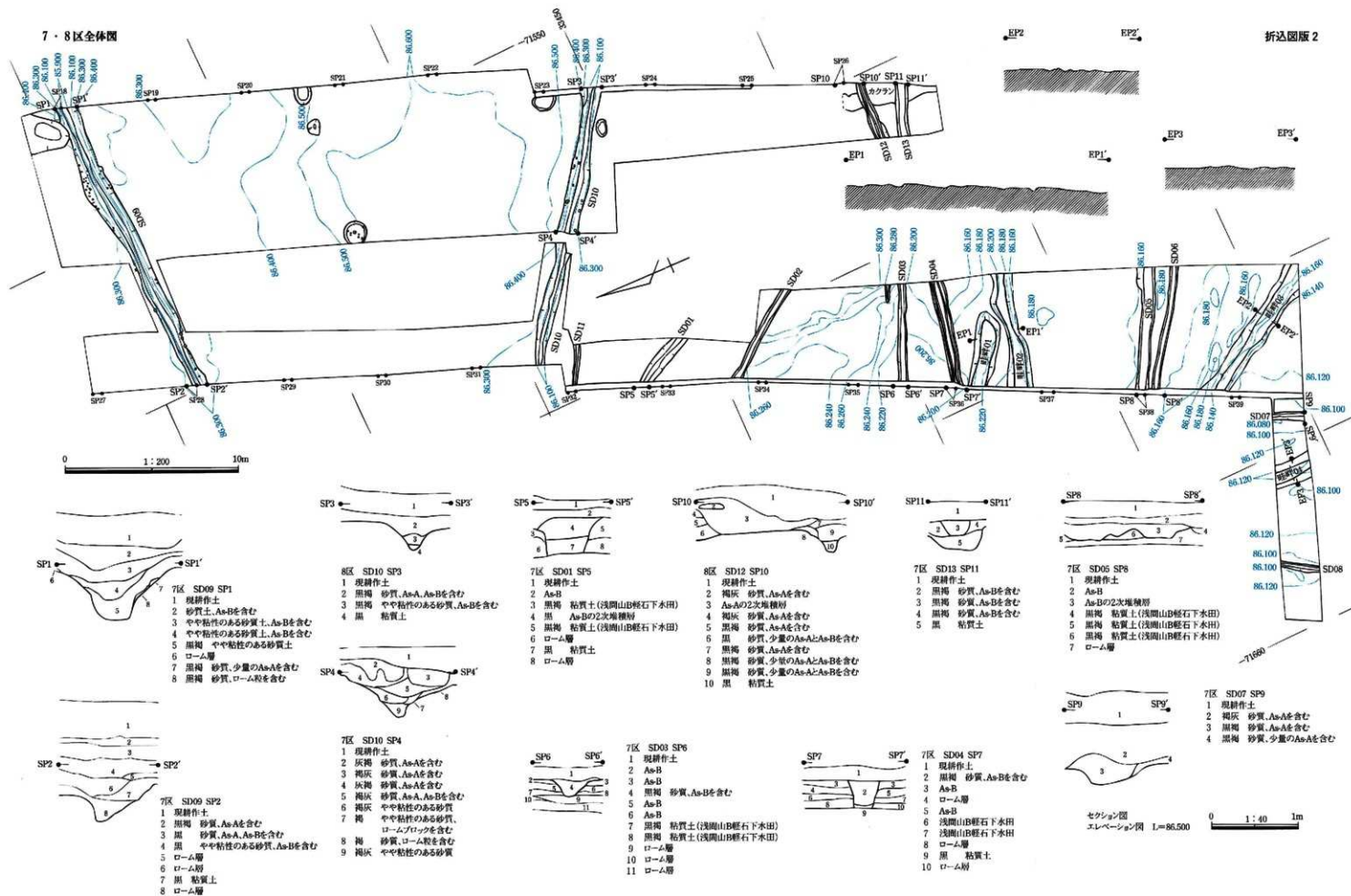
3区東カセクション SP3

- 1 現地面 (地)
- 2 As-Aの2次堆積層
- 3 浅間山A軽石下木田 (褐色シルト土)
- 4 浅間山B軽石層
- 5 浅間山B軽石層
- 6 浅間山B軽石層
- 7 浅間山B軽石下木田
- 8 浅間山Bを始源とする火山灰を含む洪水層



7・8区全体図

折込図版 2



第3章 浅間山B軽石下水田跡

第1節 土層

表土からAs-B層まで1区では37～50cm、2区では34～75cm、3区では84～90cm、7区では18～40cm、であった。As-Bの堆積状況は全調査にわたって良好に堆積していた。As-B下水田層は、1区では2.5～8cm、2区では3～18cm、3区では4～7cm、7区では16～32cmであった。

高崎市北西部で広く見られる榛名山二ツ岳給源の火山灰(Hr-FA、6世紀初頭、Hr-FP、6世紀中葉)を含む洪水層は、本調査区においては見られなかった。

第2節 1区検出の浅間山B軽石下水田跡

1区の現況は水田である。周囲は田植えが終わり、調査区は水の張られた水田に囲まれていたために表土は、ぬかるみがひどく掘削すると周囲から水が注いできて遺構の確認が困難を極めた。As-B層を確認後、排水用の水路を掘り、水中ポンプで常時水を汲み上げながら掘削、精査を行った。

1区においては、16面の水田面を検出した。水田面を区画する畦畔は、東西方向の畦畔を11条、南北方向の畦畔を4条検出した。検出した東西方向の畦畔は、2.1m～16.51m、南北方向の畦畔は調査区北西端から調査区の中央部にかけての34.4mの畦畔と、もう1条は、調査区の南西端で検出した4.1mの畦畔である。他の2条は、調査区北端で検出した0.9及び1.1mの畦畔である。畦畔の高さは以下の表のとおり(数値は最高値、単位cm)。

畦畔 01	EP 1	4	EP 2	3	EP 4	3	EP 5	5	EP 7	3	EP 8	5						
畦畔 02	EP10	2	EP12	5														
畦畔 03	EP14	7																
畦畔 04	EP11	5	EP17	4														
畦畔 05	EP20	5																
畦畔 06	EP21	3	EP28	3														
畦畔 07	EP24	4																
畦畔 08	EP26	2	EP29	5														
畦畔 09	EP30	4																
畦畔 10	EP34	2																
畦畔 11	EP35	3																
畦畔 12	EP 3	4																
畦畔 13	EP 6	2																
畦畔 14	EP36	8																
畦畔 15	EP 9	4	EP14	4	EP15	6	EP18	4	EP19	7	EP22	6	EP23	7	EP27	6	EP25	4

水田面は、南北方向に短く、東西方向に長い方形である。1区画の水田面を検出できなかったで、水田の面積は不明である。東西、南北の畦畔の造られ方を見ると、規格性のある水田ではないかと思われる。また、畦畔上及び畦畔周辺に多数の凹凸があった。残りの状態のよいものはなかったが、人の足跡と考えられる。

第3節 2・3区検出の浅間山B軽石下水田跡

2区は、調査区の北端に位置する。掘削前の現況は、水田と畑である。調査区の南端の一部が水田であった。現水田下の層位は、耕作土、As-A、As-Bを含む混土層、As-B層、As-B下水田層、基盤層である。また、調査区のほとんどもは、現畑地であるところからの検出である。畑地下の層位は、耕作土、As-Aの2次堆積層、As-B層、As-B下水田層、基盤層である。2区においては、東西方向の畦畔を2条、南北方向の畦畔を1条検出した。畦畔で区画された水田面を検出することはできなかった。2区は、1区、2区よりも南方向の傾斜が顕著である。

3区は、農用水路を挟んで2区の西側の調査区である。掘削前の現況は、畑地である。調査対象区域であったが、農作物が栽培されていたため、掘削面積を縮小しなければならなかった。3区の層位は、現耕作土、As-A

の2次堆積層、褐色シルト質土層、As-B層、As-B下水田層、基盤層である。掘削面積が狭小であったため、畦畔の検出はできなかった。As-Aの2次堆積層下の褐色シルト質土層には、蒲鉾型の畦畔様の高まりが検出されたが、この面が近世の水田跡かどうかは不明である。

第4節 7・8区検出の浅間山B軽石下水田跡

7・8区の調査区設定に当たっては、残土を搬出する予定であったが、地盤が軟弱なため調査区内で処理することになった。このため、残土を調査区の中央に置き、その両側を掘削した。

7区は、微高地から低地に地形が変換する箇所検出した水田跡である。層位は、現耕作土、As-B層、As-B下水田層、基盤層である。SD10から約6mの幅の範囲には、As-Bの堆積層及びAs-B下水田層なかったが、As-Bを含み粘性の弱い黒色粘土質層が見られた。7区の水田跡は、現耕作土の直下にAs-B層、As-B下水田層、基盤層の層位で、比較的浅いところで検出した水田跡である。As-B層の堆積は良好であった。この水田面では、4条の畦畔を検出した。1区で検出した畦畔に比べると、規格性はなく、水田面の形も不定形である。8区は、7区の東側に設定した調査区である。7区と同様に微高地から低地への変換点に隣接し、緩やかに南に傾斜する。7区の延長で、As-B下水田跡の検出を予想したが、調査区の東西の壁断面には、As-B層、As-B下水田層は確認できなかった。8区の層位は、表土、As-A、As-Bの混土層、As-Bを含む粘性の弱い粘土質層、基盤層である。自然の状態では、As-B層が他の層と交じり合うことはないから、後世の人によって何らかの手が加わったものと思われる。

第5節 灌漑施設

水田耕作を営むためには大規模な灌漑施設が必要である。今回調査をした1, 2, 3, 7, 8区の水田跡については、用水路跡と考えられるような施設は検出できなかった。

1区で1条、7区で10条、8区で4条の溝跡を検出した。2・3区では検出されなかった。1区の溝跡は、畦畔が規格性を持つにもかかわらず、畦畔とは若干方向が異なる。溝の造られ方も、基盤層に達するまで掘ったものではなく、接近する畦畔と畦畔の間に水を通した程度のものである。1区検出した溝跡は、水田跡とほぼ同じ時期に作られたものと思われるが、7・8区で検出した溝跡は、壁断面、溝の埋土を勘案すると後世に作られた溝である。7区で検出した条の溝跡は、As-B層の上から掘られた溝で、水田層を掘り下げ基盤層に達している。溝は、調査区の壁断面の観察によれば、As-B層、As-B下水田層を切り基盤層に達する。また、溝は掘削されたAs-Bで埋まっていた。

高崎市域における浅間山給源B軽石下水田跡については、「新編 高崎市史 資料編 2 原始古代Ⅱ」(1999、高崎市刊)をご参照いただきたい。本書は、高崎市教育委員会、高崎市遺跡調査会が実施した高崎市の水田跡関係の調査結果を集大成したものである。

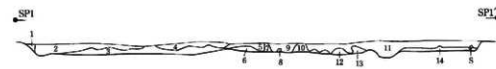
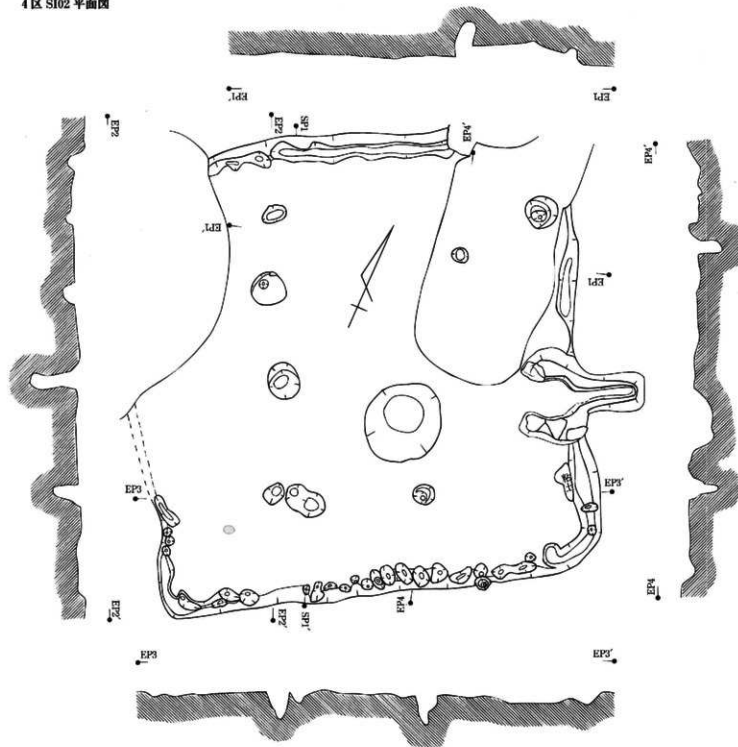
第4章 古墳時代遺構

第1節 竪穴住居跡

4区における基本的な層位は、表土、As-Aの混土層、As-Bの混土層、黒ボク土層、基盤層である。

4区ではSI01、SI02の2軒の竪穴住居跡を検出した。SI01はSD01の東で、調査区のほぼ中央部で検出した。倒木痕と中世の溝によって、南西の隅と北東の隅を壊されていた。住居跡の大きさは、5.1m×4.3mである。住居の主方向は、N-5°-W。カマドは、壊状況が激しくほとんど形をとどめていなかった。東向きのカマドを持っていたと思われる。精査をしたが、対の櫛石の一部と土師器の破片が数点出土したのみであった。直径が5cm前後の柱穴を伴う、幅が15～20cmの壁周溝がめぐっていた。坏、甕の口縁等が床付近で数点出土した。

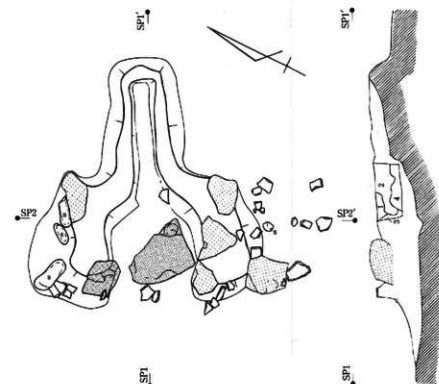
SI02は、調査区北東部の壁付近で検出した。中世の井戸跡及び溝跡によって、南西部の隅と北隅が壊されていた。住居跡の大きさは4.9m×4.6mの方形である。主方向は、N-20°-Wである。北東方向を向くカマドを持つ。幅が15～20cmの壁周溝がめぐっていた。



ベクトルセクション

- 1 ローム層
- 2 黒褐色 砂質、ローム粒 (φ2mm未満) を含む
- 3 黒褐色 やや粘性のある砂質、ローム粒を含む
- 4 黒褐色 砂質、ローム粒を含む
- 5 黒褐色 砂質、ローム粒を含む
- 6 黒褐色 やや粘性のある砂質、ローム粒を含む
- 7 ロームブロック

- 8 ロームブロック
- 9 黒褐色 砂質土
- 10 黒褐色 砂質、ローム粒を含む
- 11 黒褐色 砂質、焼土粒、ローム粒を含む
- 12 黒褐色 やや粘性のある砂質土
- 13 ロームブロック
- 14 ロームブロック

セクション・エレベーション図
L=86,800

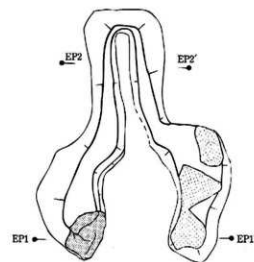
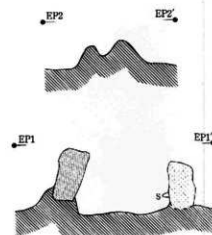
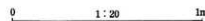
カマド SP1

- 1 灰赤 砂質、焼土粒を含む
- 2 灰赤 砂質、焼土ブロックを含む
- 3 黒褐色 砂質、少量の焼土粒を含む
- 4 灰褐色 砂質、少量の焼土粒を含む



カマド SP2

- 1 灰赤 砂質、焼土粒を含む
- 2 黒褐色 砂質土
- 3 黒褐色 砂質、少量の焼土粒を含む
- 4 黒 やや粘性のある砂質土

セクション・エレベーション図
L=86,800

第2節 溝跡

4区では、調査区の西端付近で南北方向のSD03を、5区では調査区中央部付近で北東—南西方向の溝を検出した。両溝跡は、基盤層を掘り込み、As-Bを含まない土層で埋まった溝跡であった。SD03は黒ボク土1層の堆積であった。5区の溝は、確認面での検出であったため溝底部のみの検出になった。底部の基盤層には掘った多数のスズ痕があった。

第5章 中世遺構

第1節 下之城村前館址

下之城村館址は、複郭(回郭)式の館址である。館址に関連する遺構は4・5区において検出したものである。4区では、館址西辺に掘られた南北方向の堀跡SD01と東西方向のSD02があり、SD02はSD01に直角に交わっている。SD01とSD02には切りあい関係がなかったため、同時期に掘られた堀と思われる。SD12は館址の内堀と思われるもので、東西方向と南北方向に掘られ、堀が向きを変える角を南東部で検出した。SD12には、土橋が作られていた。また、5区検出の館址の南辺に位置すると思われる平行な東西方向の二重堀を検出した。

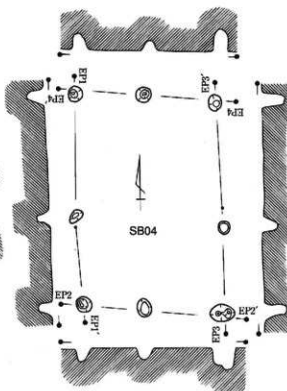
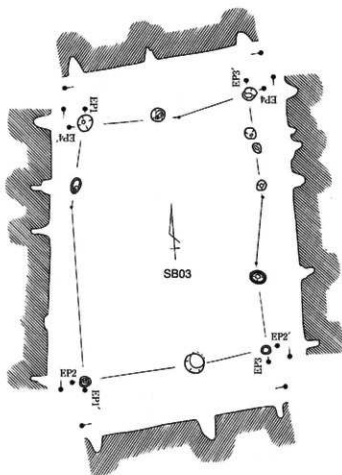
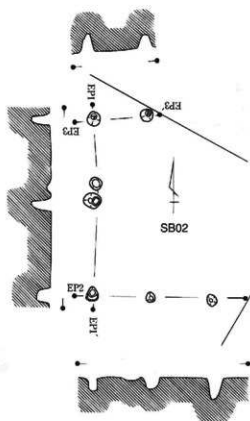
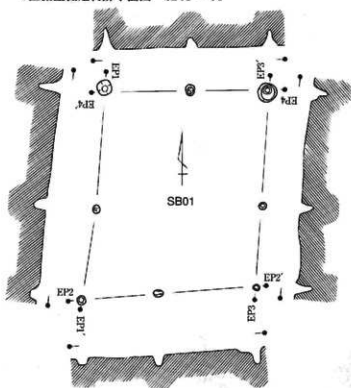
和田下之城は、永禄5～6年に和田城の支城として、和田城主繁盛が第正盛のために築城したといわれている。和田下之城址は昭和30年代まで遺構(堀及び土塁等)が残っていたが、その後の区画整理事業や国道17号線のバイパス建設等の開発によって、現在では遺構がほとんど破壊されてしまっている。

さて、和田下之城が築城された当時の歴史的背景を見ると、和田氏は、隣接して城を構える倉賀野氏とは共に山内上杉に属しており、両者の間には敵対関係はなかった。永禄3年に越後の上杉氏が関東へ越山してくると、和田氏は上杉と敵対関係にある甲斐の武田氏と同盟を結びその傘下に入った。和田氏がなぜ武田氏と結んだかは不明であるが、当時の上州の状況を見ると、上州には一国を支配できるような有力な武士がおらず南から後北条氏、北からの上杉氏、西からの武田氏などの有力戦国武将の侵攻にさらされていた。こうした状況にあって、小豪族にすぎない和田氏は、一族の存亡をかけての武田氏との同盟を選択したものであろうと思われる。その結果、和田氏と倉賀野氏は敵対関係となり、その過程で和田下之城が築城されたと考えられている。

今回の調査で検出した「下之城村前館址」は、和田下之城の関連施設であると思われる。倉賀野氏との緊張が高まるにつれて、その対抗上、和田下之城が拡大強化された。これに併せて本館が設けられた可能性もあるし、或はまた、既存の館が強化された可能性も考えられる。和田氏と倉賀野氏の城館と屋敷の配置を見ると、五貫堀川を挟んで、北側を和田氏、南側を倉賀野氏が押さえていた。和田氏側は、和田城を中心に、和田下之城(①16世紀後半、②和田氏、③下之城町村内・松村、p88～90)や下之城村前館址を根拠とし、倉賀野氏側は、倉賀野城(①室町時代、②倉賀野氏、③倉賀野町上町・中町・八幡前・宮之前、p93～95)を中心に、倉賀野西城(①室町時代、②倉賀野氏、③倉賀野町東郷、p92～93)、倉賀野東城(①16世紀、②不明、③倉賀野町橋東、p124)、倉賀野新堀屋敷(①室町時代、②不明、③倉賀野町上新堀、p90)、養徳寺(①戦国時代、②不明、③倉賀野町下橋越、p91)、上稲荷前屋敷(①室町時代、②不明、③倉賀野町上稲荷前、p91)、永泉寺の砦(①16世紀、②不明、③倉賀野町中稲荷前、p93)、万福寺屋敷(①不明、②不明、③倉賀野町万福寺、p91)、朝日長者屋敷(①室町時代、②不明、③倉賀野町小六、p91)、宮之前屋敷(①室町時代、②不明、③倉賀野町宮之前、p92)等を構えて、対峙していたと思われる。しかし、倉賀野氏との対立関係も、武田氏の倉賀野城攻撃によって城が落城すると、以後、倉賀野城は武田氏の支配下に入った。このため、和田下之城は和田城と倉賀野城とのつなぎの城へと役割を変えたと考えられる。「下之城村前館址」が、いつごろまで存続したかは不明である。しかし、館址を囲む堀の規模や4・5区合わせて11軒分の掘立柱建物跡(中には重複するものもあり数はもう少し増えると思われる)を検出した。こうしたことから、館址は、ある程度の期間存続していたのではないかとと思われる。

※下之城町、倉賀野町地域で、現在までに確認されている城館址、屋敷跡については、紙面の都合により位置図を掲載できなかった。「高崎市遺跡分布地図」(1998年、高崎市教育委員会刊)をご参照いただきたい。

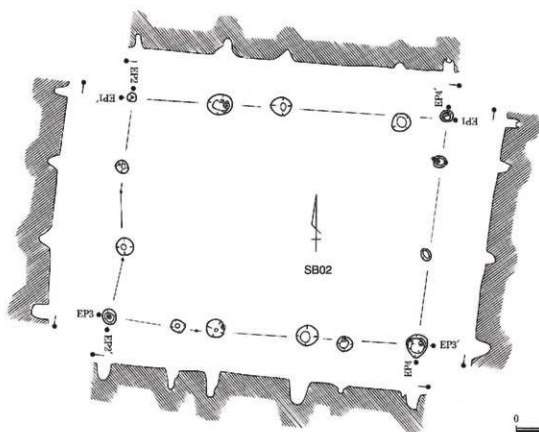
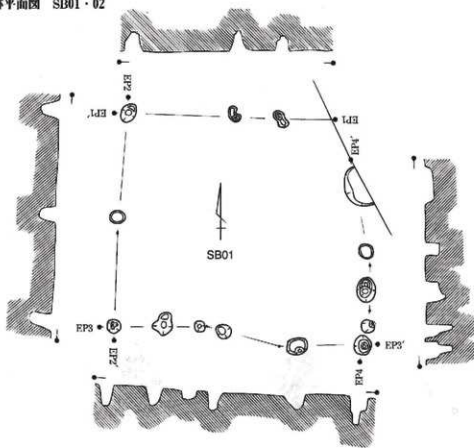
4区掘立柱建物跡平面図 SB01～04



L=85.800

0 1:80 2m

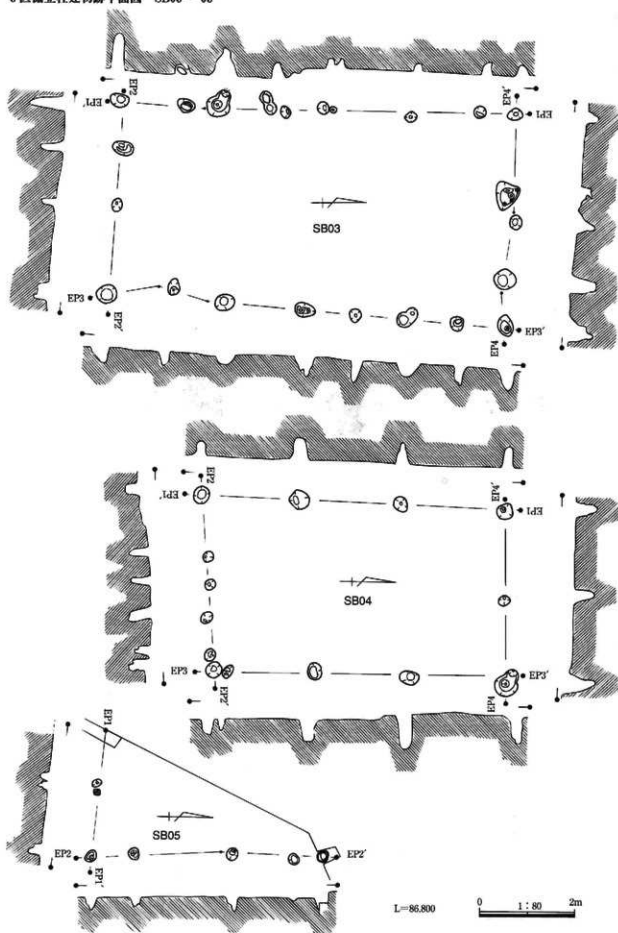
5区掘立柱建物跡平面图 SB01・02



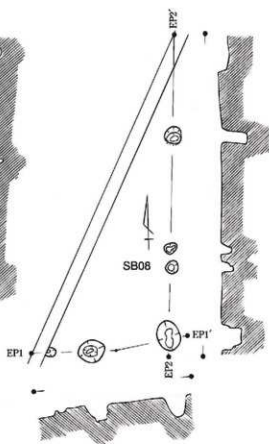
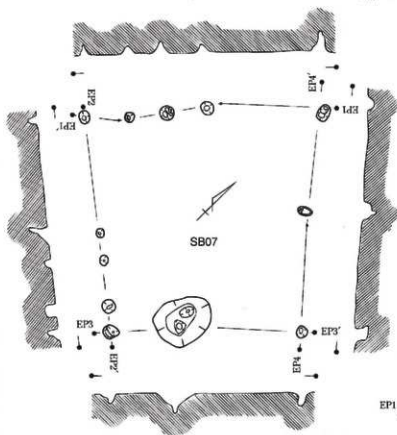
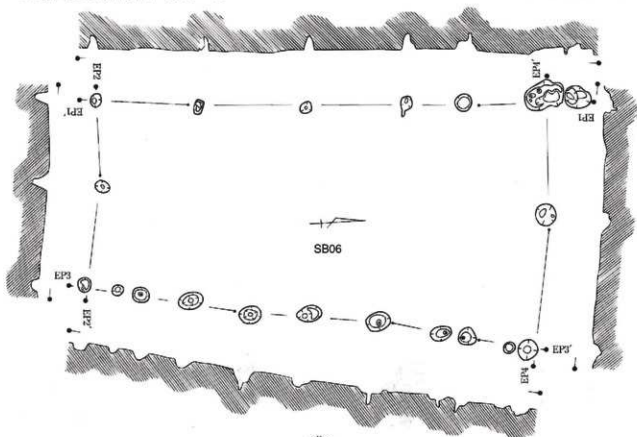
L=86.800

0 1:80 2m

5区獨立柱建物跡平面圖 SB03 ~ 05



5区隔立柱建物跡平面図 SB06 ~ 08

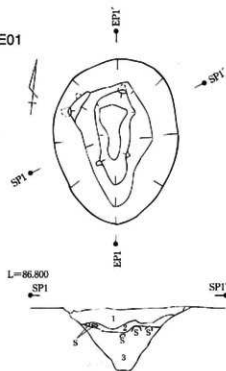


L=86.800

0 1 : 80 2m

4・5区井戸跡平面図・セクション図・エレベーション図

4区 SE01

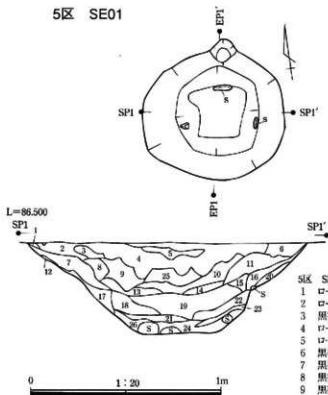


- 4区 SE01 SP1
- | | | | |
|---|----|---------|---------------------|
| 1 | 黒褐 | 10YR3/1 | やや粘性のある砂質, AsBを少量含む |
| 2 | 黒褐 | 10YR3/2 | やや粘性のある砂質, ローム粒を含む |
| 3 | 黒褐 | 19YR3/2 | やや粘性のある砂質, 礫が大量に混入 |

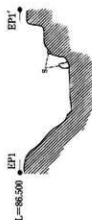


0 1:40 1m

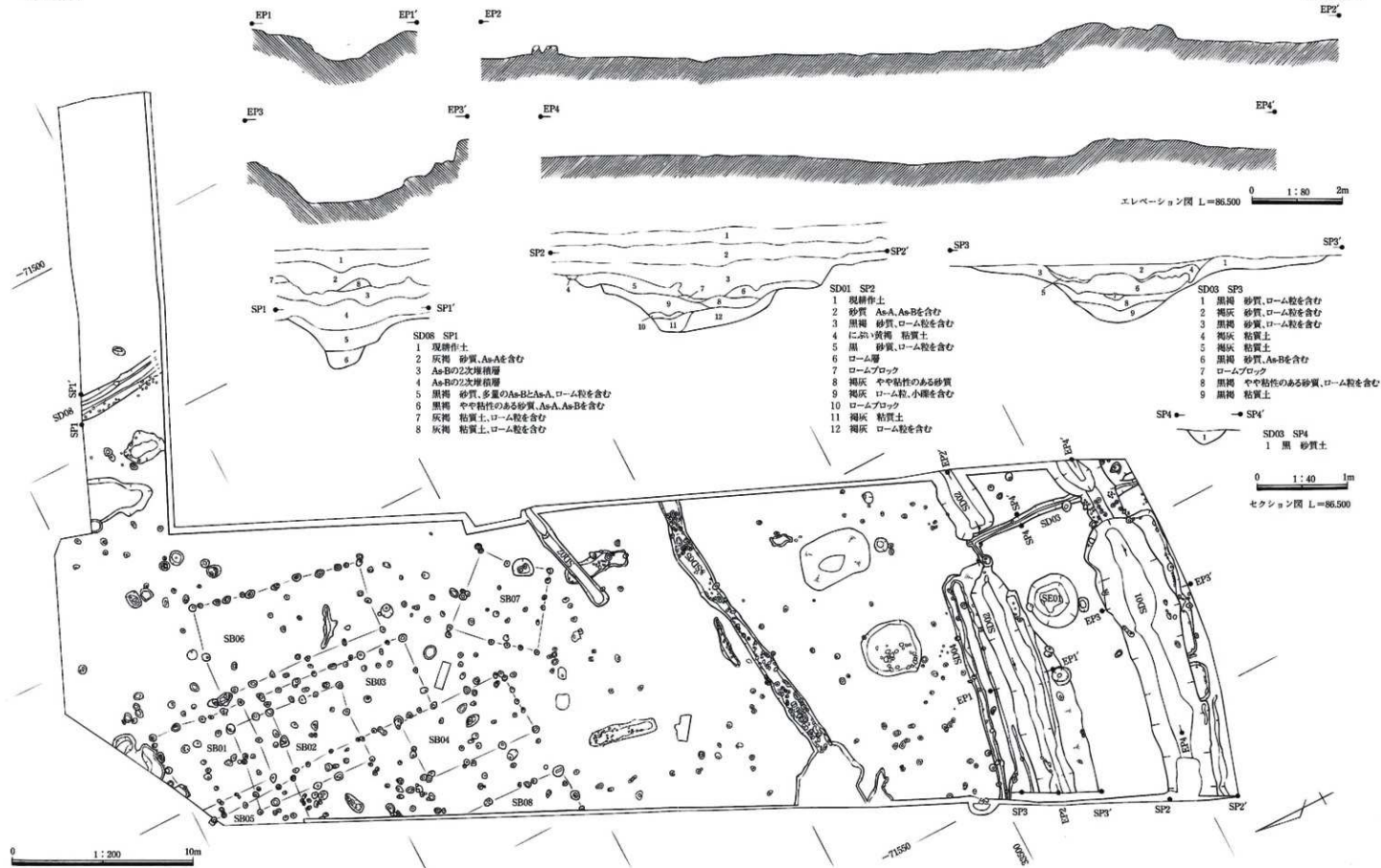
5区 SE01



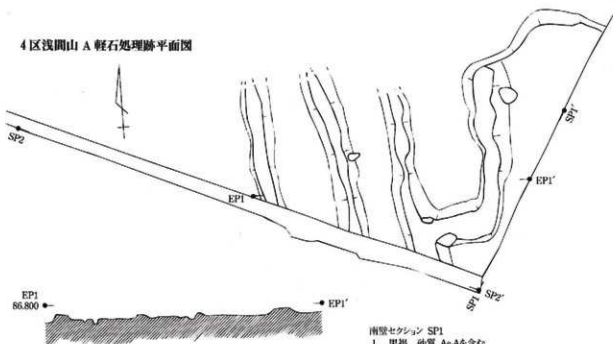
- 5区 SE01 SP1
- | | | | | |
|----|-------------------|----|----|----------------|
| 1 | ロームを含む砂質土 | 14 | 黒褐 | 砂質, ローム粒を含む |
| 2 | ロームブロックを含む砂質土 | 15 | 黒 | 砂質, ローム粒を含む |
| 3 | 黒褐 砂質土 | 16 | 黒褐 | 砂質, ローム粒を含む |
| 4 | ロームブロックを含む砂質土 | 17 | 黒褐 | 砂質, ローム粒を含む |
| 5 | ローム層 | 18 | 黒 | 粘土層, ローム粒を含む |
| 6 | 黒褐 砂質, ローム粒を含む | 19 | 黒 | 砂質, ローム粒を含む |
| 7 | 黒褐 砂質, ローム粒を含む | 20 | 黄褐 | 砂質, ローム粒を含む |
| 8 | 黒褐 砂質, ロームブロックを含む | 21 | 黒褐 | 砂質, ローム粒を含む |
| 9 | 黒褐 砂質, ロームブロックを含む | 22 | 黒褐 | 砂質, ローム粒を含む |
| 10 | 黒褐 砂質土 | 23 | 黒褐 | 粘土層, ローム粒を含む |
| 11 | 黒褐 砂質土 | 24 | 黒 | 粘土層 |
| 12 | 砂質, ローム粒を多量に含む | 25 | 黒褐 | 砂質, ロームブロックを含む |
| 13 | 黒褐 砂質, ローム粒を含む | 26 | 黒 | 粘土層, ローム粒を含む |



0 1:40 1m

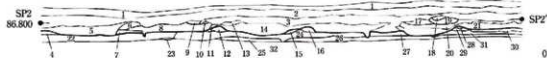
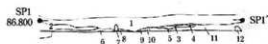


4区浅間山A軽石処理跡平面図



南壁セクション SP1

- 1 黒褐色 砂質, As-Aを含む
- 2 As-Aの2次堆積層
- 3 As-Aの2次堆積層
- 4 As-Aの2次堆積層
- 5 黒褐色 粒子の粗い砂質土
- 6 黒褐色 やや粘性のある砂質土
- 7 黒 砂質土
- 8 As-Aの2次堆積層
- 9 As-Aの2次堆積層
- 10 黒褐色 砂質土
- 11 As-Aの2次堆積層
- 12 As-Aの2次堆積層



南壁セクション SP2

- | | | |
|-------------------|---------------------------|-----------------------------|
| 1 現耕作土 | 12 黒褐色 やや粒子の粗い砂質土 | 23 黒 やや粘性のある砂質土, ロームブロックを含む |
| 2 黒褐色 砂質, As-Aを含む | 13 黒褐色 やや粒子の粗い砂質, As-Aを含む | 24 黒褐色 砂質, 細かいローム粒を含む |
| 3 黒褐色 砂質, As-Aを含む | 14 As-Aの2次堆積層 | 25 黒 粘質土 |
| 4 黒褐色 粘土質 | 15 黒褐色 やや粒子の粗い砂質, As-Aを含む | 26 黒 粘質土 |
| 5 As-Aの2次堆積層 | 16 黒褐色 砂質, 細かいローム粒を含む | 27 黒褐色 砂質, 細かいローム粒を含む |
| 6 黒褐色 砂質, As-Aを含む | 17 黒褐色 砂質土 | 28 黒褐色 砂質土 |
| 7 黒褐色 粒子の粗い砂質土 | 18 黒褐色 砂質, As-Aを含む | 29 黒褐色 砂質土 |
| 8 As-Aの2次堆積層 | 19 黒褐色 砂質, As-Aを含む | 30 黒褐色 砂質, ローム粒を少量含む |
| 9 黒褐色 砂質, As-Aを含む | 20 黒褐色 砂質, As-Aを少量含む | 31 黒 砂質土 |
| 10 黒 粒子の粗い砂質土 | 21 As-Aの2次堆積層 | 32 ローム層 |
| 11 黒 粒子の粗い砂質土 | 22 黒 砂質, 細かいローム粒を含む | |

参考文献

- 1) 「新編 高崎市史 資料編3 中世I」(1996年, 高崎市刊)
- 2) 地上記括弧内の記述は, ①築造時期, ②築造者, ③所在地及び「新編 高崎市史 資料編3 中世」の該当ページを示す。
- 2) 「高崎市遺跡分布地図」(1998年, 高崎市教育委員会刊, p97~100)

1 堀跡

4区検出のSD01は、長さが23.8m、幅が1.5～2.5m、深さは17.8～75.5cmである。SD02と交わる付近から、底部が緩やかに上がり浅くなる。SD01がさらに南に延びて5区のSD02に繋がると思われる。SD12は、東西方向と南北方向に掘られたもので、内堀である。角の部分では、底部が緩やかに上がり浅くなる。

土壌によって、堀が東西に分かれていた。堀の内側に土塁が設けられていた可能性を示す基盤層のブロックを含む黒褐色土層の流れ込みがあった。5区検出のSD01は、調査区南端で、SD02はその北側で検出した。

SD01 は、東壁 4.5m のところから東に 1.8m ほど底部が上がって浅くなり、やや下がって、壁まで続く。SD02 は、1.5m の土橋によって西と東に分かれる。西壁と東壁は中心の値で、東壁が約 2 m 南にずれて掘られている。また、東壁の内側に、横を設けたと思われるピット列があった。

2 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡については、下記の表にまとめた。(建物跡の一部が遺構外となったものについては推定値を括弧に入れて示した)

検出区	番号	主方向	長軸	短軸	東西の梁行	南北の梁行	柱穴の大きさ	柱穴の深さ
4 区	SB01	N-1°-W	2 間	2 間	3 本	3 本	25cm ~ 30cm	18cm ~ 46cm
4 区	SB02	N-0°-W	(3 間以上)	2 間	(3 本以上)	3 本	20cm ~ 35cm	20cm ~ 45cm
4 区	SB03	N-0°-W	3 間	2 間	3 本	4 本	18cm ~ 40cm	25cm ~ 48cm
4 区	SB04	N-0°-W	2 間	2 間	3 本	3 本	24cm ~ 35cm	24cm ~ 50cm
5 区	SB01	N-2°-W	3 間	2 間	3 本	4 本	28cm ~ 40cm	30cm ~ 58cm
5 区	SB02	N-3°-W	4 間	3 間	4 本	5 本	20cm ~ 48cm	18cm ~ 54cm
5 区	SB03	N-3°-W	7 間	3 間	4 本	8 本	25cm ~ 50cm	30cm ~ 80cm
5 区	SB04	N-3°-W	4 間	2 間	3 本 / 5 本	4 本	20cm ~ 40cm	20cm ~ 70cm
5 区	SB05	N-0°-W	(4 間以上)	(2 間以上)	(2 本以上)	(4 本以上)	18cm ~ 25cm	20cm ~ 32cm
5 区	SB06	N-25°-W	5 間	2 間	3 本	6 本	18cm ~ 40cm	18cm ~ 44cm
5 区	SB07	N-40°-W	2 間	2 間	3 本	5 本 / 3 本	20cm ~ 35cm	20cm ~ 44cm
5 区	SB08	N-2°-W	(2 間以上)	(3 間以上)	(2 本以上)	(3 本以上)	20cm ~ 55cm	20cm ~ 53cm

第 2 節 井戸跡

4・5 区において 2 箇所の井戸跡を検出した。作られた時期はどちらの井戸跡も館址と同時期のものと思われる。SE01 は、4 区調査区の掘立柱建物跡の西側で検出した。素掘りの井戸で、南北方向の長径 3.4m、東西方向の短径 2.6m、中場は南北方向の長径 2.5m、東西方向の短径 1.8m、深さは 85.2cm (旧井戸)、85.3cm (新井戸) である。この井戸跡は、井戸の作り変えによって二つの井戸が重なっているものと思われる。井戸の底部と思われる箇所が二つあり、新しいと思われる井戸の底部は、古い井戸よりも若干深く掘られていた。井戸の掘め土は、底部付近に 20 ~ 40cm の川原石が、その上層に As-B を含む黒褐色土が堆積していた。遺物の出土はなかった。SE01 は 5 区の SD01 と SD02 間で検出した井戸跡である。素掘りの井戸で、開口部は直径 2.4m の円、中場は南北方向が 1.8m、東西方向が 1.7m の方形、底部は平らで、南北方向が 1.1m、東西方向が 1.0m の方形、深さ 85.3cm である。掘め土は、底部付近では 10 ~ 40cm の川原石が、その上層は、As-B 或は基盤層の黄褐色土ブロックを含む層が堆積していた。遺物は出土しなかった。

第 3 節 溝跡

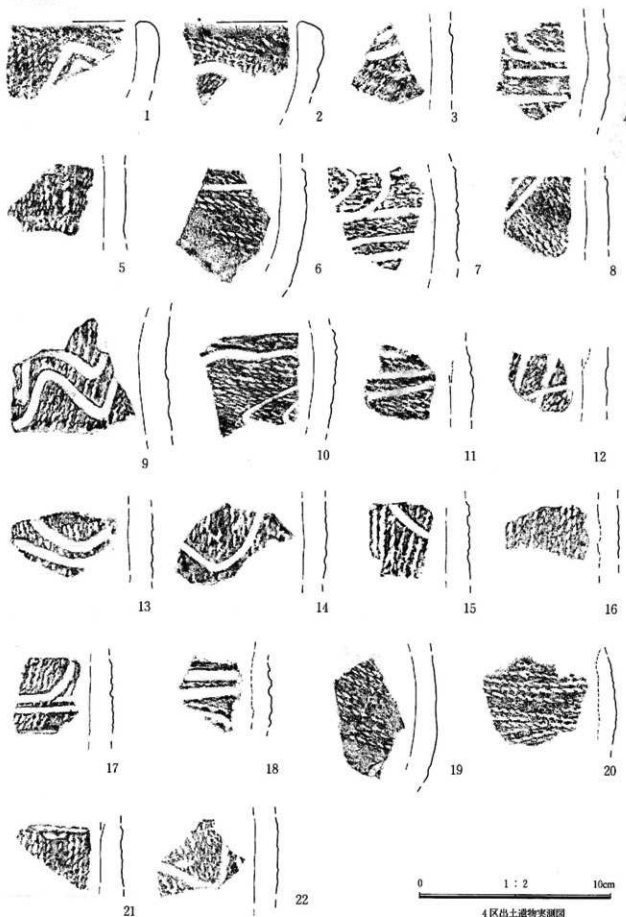
4 区検出の館址内において数条の溝跡を検出した。SD04、SD05 は、ほぼ南北に掘られている。切り合い関係があり、SD04 は SD05 によって切られている。調査区の壁付近において、SD05 の底部に集石があった。また、SD04、SD05 の中央部より南側は、基盤層のブロックを含む、黒褐色土層の下から検出したものである。

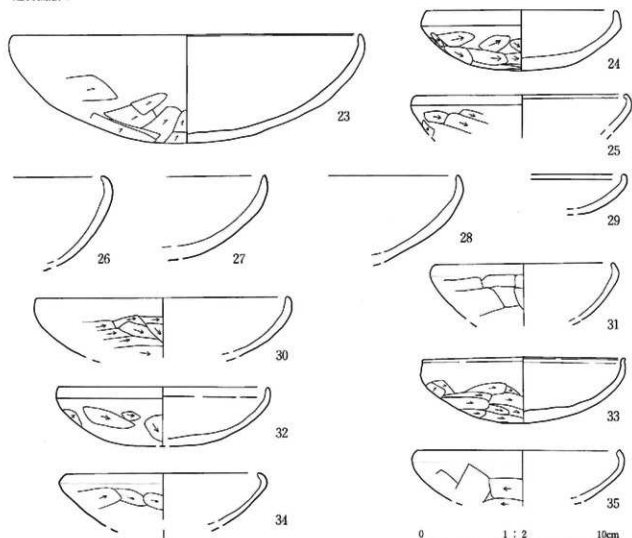
第 6 章 近世遺構

第 1 節 浅間山 A 軽石処理跡

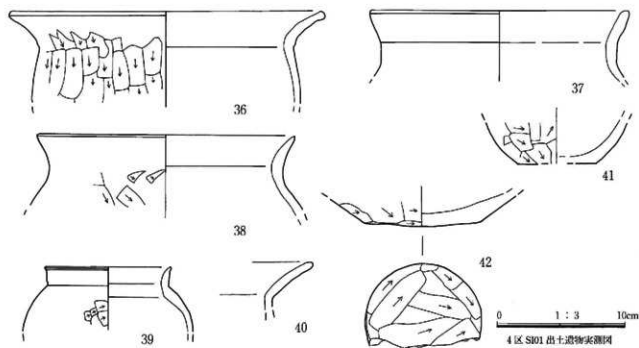
A 軽石処理跡は、4 区の調査区南東隅及び 4 区の拡張部において検出した遺構である。畝はほぼ南北に並列していた。畝の間隔は、1.2 ~ 1.7m、高さは、10 ~ 14cm である。壁断面で見た As-A の 2 次堆積層は、最も堆積の厚い箇所の値を見ると、セクション図中の 5 で、20cm、8 で 20cm、14 で 24cm、21 で 18cm の堆積があった。また、エレベーション断面で見た畝の高さは 10 ~ 14cm である。拡張部は館址の内堀を検出のために拡張したもので、壁断面から As-A 処理跡を確認するとどまった。検出した部分での判断であるが、As-A の処理跡の規模は東西方向に 20 ~ 30m (推定)、南北方向は 6 ~ 7 m くらいの幅ではないかと思われる。

遺物図版 1



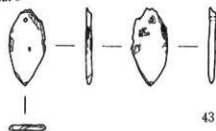


4区 SI01 出土遺物実測図

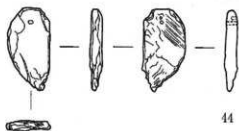


4区 SI01 出土遺物実測図

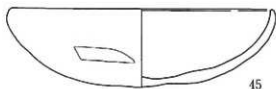
道物图版 3



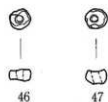
43



44



45



46

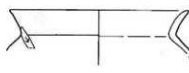
47

0 1 : 2 10cm

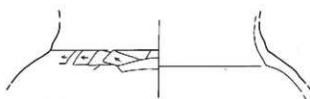
4区 S101·02 出土器物实测图



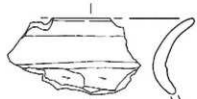
48



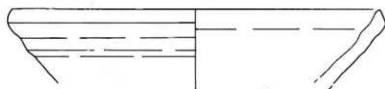
49



50



51



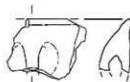
52



54



53



55



56

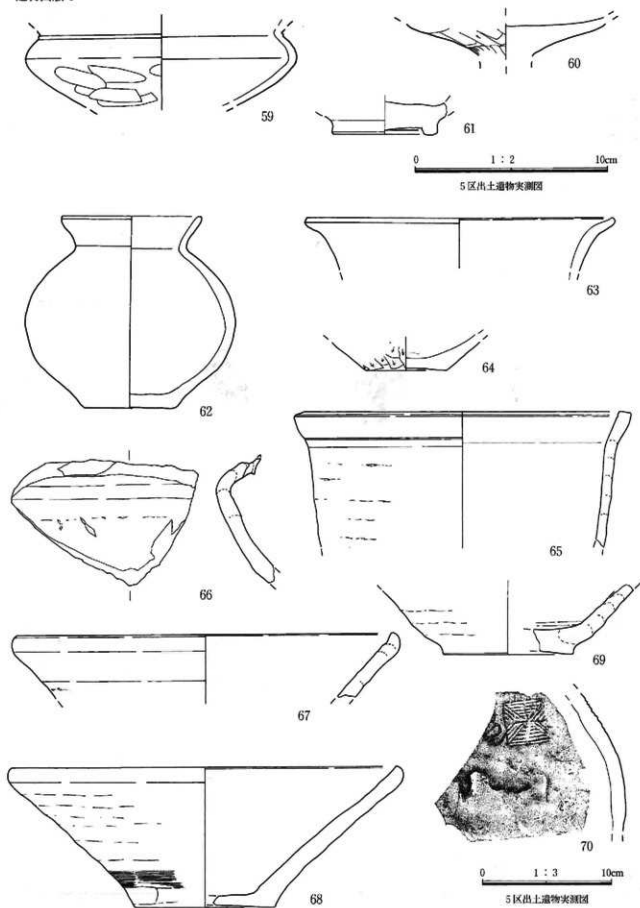
57

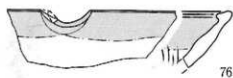
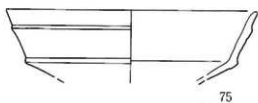
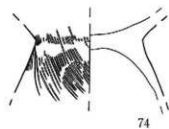
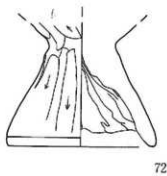
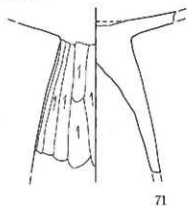


58

0 1 : 3 10cm

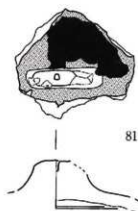
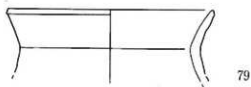
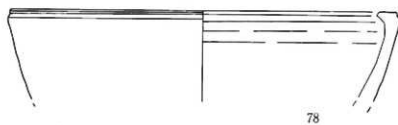
4区出土器物实测图





0 1 : 2 10cm

4区出土遺物実測図



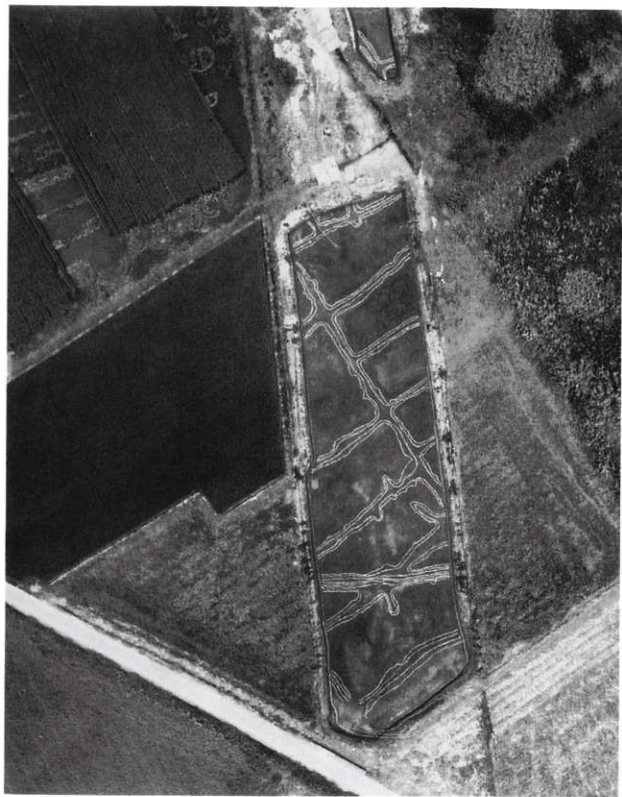
0 1 : 3 10cm

4区出土遺物実測図

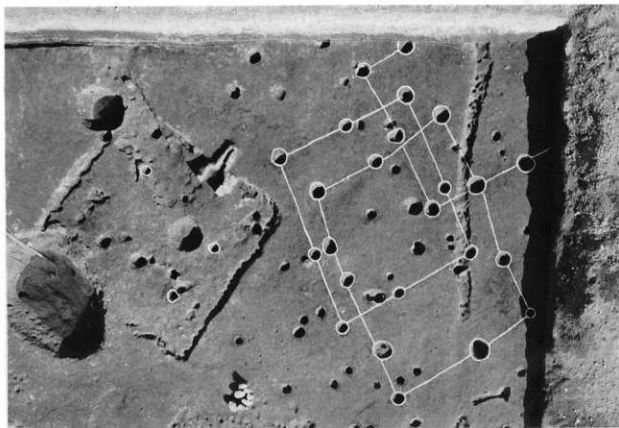
遺物觀察表

[illegible]

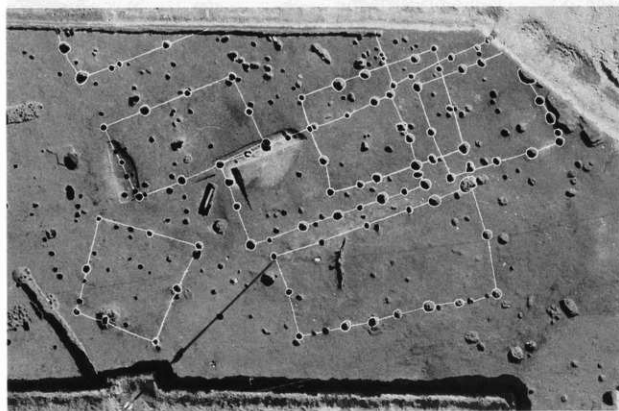
写 真 图 版



1区 全 景



4区掘立柱建物跡



5区掘立柱建物跡



4区 SI01 遺物出土状況



4区 SI02 かまど



4区 SD01



4区 SD12 全景



5区 SD01



5区 SD02



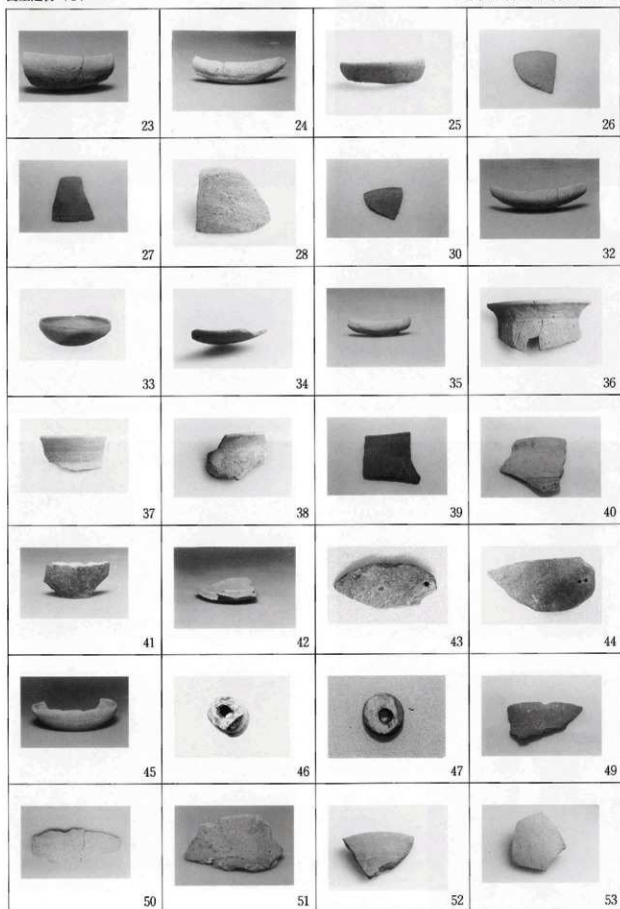
7・8区
SD09



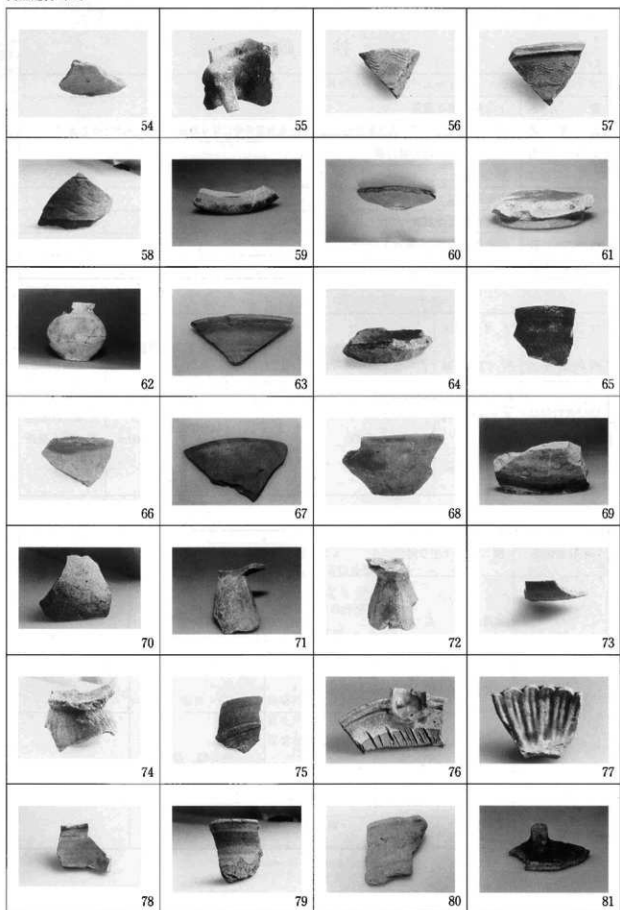
4区 As-A 処理セクション

出土遺物 (1)

※番号は22頁遺物観察表と対応する



出土遺物 (2)



抄 録

フリガナ	シモノジョウムラマエヨインセキ
書 名	下之城村前Ⅳ遺跡
副 書 名	高崎市計画事業高崎操車場跡地周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第181集
編 著 者 名	吉田昌利
発 行 者 名	高崎市教育委員会
所 在	高崎市高松町 35 番地 1
発行年月日	平成 14 年 3 月 25 日

フリガナ 所取遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北 緯 東 経	調査期間	調査面積 m	調査原因
		市町村	遺跡番号				
シモノジョウムラマエヨインセキ 下之城村前Ⅳ 遺跡	群馬県高崎市 下之城町字村 前 750-1,751-1,748-1, 719,745-1,721,722, 723,699,697外	102020	359	139° 8' 87" 36° 2' 8"	20010626 20011227	4,500m ²	土地区画整理 事に伴う道路 建設

所取遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特 記 事 項
下之城村前 Ⅳ遺跡	集落跡	古 墳	竪穴住居跡 2 軒、 溝跡 2 条	坏、甕	
	生産址	平 安	水田跡		
	城館址	中 世	堀跡 5 条、 掘立柱建物 11 軒	内耳堀、握鉢	
	生産址	近 世	畝 跡		

高崎市文化財調査報告書第181集

下之城村前Ⅳ遺跡

2002年3月20日 印刷

2002年3月25日 発行

編集・発行 高崎市教育委員会
高崎市高松町35番地1
電話 027 (321) 1292

印刷 杉浦印刷(株)
〒370-0006 高崎市問屋町2-3-10
電話 027 (361) 1720

本報告書は再生紙を使用しています。



付図1
4区全体図



付图 2
下之城村前館址全体図
181集 (359)

